津古牟田遺跡６

－福岡県小郡市津古所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書　第 333 集

2020

小郡市教育委員会

序　文

本書は、小郡市津古牟田遺跡６次調査（５次調査の一部を含む）の発掘調査報告書です。小郡市津古地内における宅地造成に先立って、小郡市教育委員会が平成29・30年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

発掘調査地点は、筑紫野市との市境に位置し、筑紫野市側は隈・西小田遺跡群として発掘調査が実施され、弥生時代の甕棺墓と集落が展開することがわかっています。今回の調査では、丘陵頂部に甕棺墓群が、その周辺には貯蔵穴、尾根上には周溝墓を確認することができました。この丘陵上における土地利用の在り方を示す貴重な発見となりました。

埋蔵文化財は、地域の歴史を語るうえで欠かせないものです。本書が文化財に対するご理解を得るものとして、地域の歴史に対する興味をもっていただくための材料として、さらには教育、学術研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査にご理解とご協力をいただいた地域住民のみなさま、そして現地作業にあたった地元作業員さんのみなさま、発掘調査を進めるにあたってお世話になった多くの方に感謝を申し上げ、序文といたします。

令和２年３月31日
小郡市教育委員会
教育長　秋永　晃生

例　言

1．本書は、株式会社嘉賀工務店による宅地造成に伴い、小郡市教育委員会が平成30年度に実施した津古牟田遺跡６次調査の発掘調査記録である。平成29年度に実施した津古牟田遺跡５次調査の内容を一部含んでいる。
2．平成30年度に『津古牟田遺跡５弥生時代甕棺墓地編』を刊行済みで、津古牟田遺跡５のそのほかの遺構について、本報告書で報告する。
3．津古牟田遺跡５の発掘調査は、宅地造成に先立ち、小郡市津古字牟田1209-2、1213、1256-2の959.88㎡において遺構を確認し、調査を実施した。津古牟田遺跡６の発掘調査は、宅地造成に伴う擁壁設置工事に先立ち、同地点214.13㎡において実施した。
4．遺構の実測については、龍孝明の他に山崎頼人、一木賢人、近藤可奈、山田桃子、建神結香子、籐文華の諸氏に多大なる協力を得た。地形測量は（株）埋蔵文化財サポートシステムが行った。
5．遺構全体の地形測量は　株式会社埋蔵文化財サポートに委託した。
6．遺構の写真撮影は龍が行い、遺物写真撮影は有限会社システム・レコに委託した。
7．遺構図中の方位は座標北を示し、全体図中の座標は世界測地系第Ⅱ系による。
8．遺物、実測図、写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
9．本書の執筆は龍が行なった。

本文目次

第１章　調査の経過と組織…… 1
　１．調査の経過…… 1
　２．組織…… 1
第２章　位置と環境…… 2
第３章　津古牟田遺跡５の概要…… 4
　１．遺構の内容…… 4
　２．調査区の概要…… 4
第４章　津古牟田遺跡５の遺構と遺物…… 4
　１．弥生時代の遺構と遺物…… 4
　　１）貯蔵穴
　　２）土坑
　　３）土壙墓
　　４）祭祀土坑
　　５）不明遺構
　２．古墳時代の遺構と遺物…… 17
　　１）古墳
　　２）周溝墓
　　３）石棺墓
　　４）木棺墓
　　５）土壙墓
　３．古代の遺構と遺物…… 25
　　１）土坑
　　２）土壙墓
　４．小結…… 25
第５章　津古牟田遺跡６の概要…… 27
　１．遺構の内容…… 27
　２．小結…… 27

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図(S=1/25,000)…… 3
第２図　津古牟田遺跡調査区位置図(S=1/5000)…… 3
第３図　津古牟田遺跡５・６全体図(S=1/500)…… 5～6
第４図　１・２号貯蔵穴平・断面図(S=1/40)…… 8
第５図　３・４号貯蔵穴 １号祭祀土坑平・断面図(S=1/40)…… 9
第６図　５・６・12・13号土坑平・断面図(S=1/40)…… 10
第７図　14・16・18号土坑平・断面図(S=1/40)…… 11
第８図　１号不明遺構平・断面図(S=1/60)…… 12
第９図　３号貯蔵穴・２～６号土坑出土土器実測図(S=1/４)…… 13
第10図　７・９・10・14・16号土坑出土土器実測図(S=1/４)…… 14
第11図　11号土坑出土土器実測図(S=1/4)…… 15
第12図　１号祭祀土坑・６号甕棺出土遺物実測図(S=１/2・1/４) 16
第13図　１号墳墳丘土層断面図(S=1/80)…… 18
第14図　２号墳平・断面図(S=1/40・1/ 80)…… 19
第15図　１・２号周溝墓周溝土層断面図(S=1/40)…… 20
第16図　１号周溝墓周溝内出土土器実測図(S=1/４)…… 20
第17図　１～４号石棺墓・３号木棺墓平断面図(S=1/40)…… 21
第18図　１・２号木棺墓平・断面図(S=1/40)…… 22
第19図　１～４号土壙墓平・断面図(S=1/40)…… 24
第20図　５～７号土壙墓平・断面図(S=1/40)…… 25
第21図　８号土坑・４号溝・２号土壙墓出土土器実測図(S=1/4)…… 26
第22図　石製品・土製品・鉄製品実測図(S=1/2)…… 28

図版目次

図版１　調査地全景(南上空から)　調査地全景(西上空から)
図版２　１・２号周溝墓(上空から)　２号墳(上空から)
図版３　１号貯蔵穴(南から)　３号貯蔵穴(北から)　3号貯蔵穴十字形石器出土状況(南東から)
図版４　５号土坑(西から)　７号土坑(東から)　11号土坑(南東から)
図版５　12号土坑(北から)　１号不明遺構(南西から)　１号不明遺構土層断面(東から)
図版６　１号墳全景(南東から)　１号周溝墓(北東から)　１号木棺墓土層断面(南から)
図版７　３号石棺墓石蓋検出状況(南西から)　３号石棺墓石蓋検出状況(西から)　２号木棺墓検出状況(南西から)
図版８　４号石棺墓石蓋検出状況(南東から)　４号石棺墓検出状況(南西から)　５号土壙墓(南西から)
図版９　出土土器写真
図版10　出土土製品・石製品・鉄製品写真

第１章　調査の経過と組織

１．調査の経過

津古牟田遺跡５・６の発掘調査は、当該地において宅地造成が計画されたことに端を発する。当該地は、以前から宅地開発が検討されていた箇所である。平成 29 年３月 25 日付で照会文書（事前審査番号 16172）が提出され、申請地の試掘調査を実施。その結果、一部に宅地造成に伴う地形改変が見られたが、地形改変を受けていない広範囲に遺構が存在することが明白であった。これにより、開発前に発掘調査が必要な旨を伝え、その後協議を重ねた。宅地開発は開発協議の段階であり、着工が未定であること。開発に先立ち、道路敷設が地形改変を受けている範囲でのみ先行して実施されること、その後、遺構の存在する宅地内道路の敷設にかかること、これらの意見を調整後、平成 29 年 10 月 18 日付けで委託契約を締結し、現地の発掘調査は平成 29 年 10 月 31 日に開始した。調査は、当初２月末の終了を目指していたが、開発計画の変更、調整により調査範囲が増加したことなどにより、調査期間の延長が図られ、実際に現地から撤収したのは平成 30 年３月 31 日のことであった。津古牟田遺跡６は、宅地造成に伴う擁壁設置工事に先立ち、平成 30 年５月 11 日付で委託契約を締結。平成 30 年５月 16 日から現地発掘調査を開始した。以下調査日誌より抜粋し、調査経過を記す。

［津古牟田遺跡５］

平成 29 年 10 月 31 日　表土剥ぎ開始　11 月 17 日　遺構検出・掘削開始　12 月４日　遺構配置図の作成開始　６日古墳の表土剥ぎを開始　19 日工事との兼ね合いで調査範囲を一部拡張　21 日２号木棺墓掘削　平成 30 年１月９日　西側道路部分の検出を開始　15 日　西側道路部分完掘　16 日　通路部分西側の検出と掘削開始　19 日１回目の空撮　23 日　古墳墳頂部の掘削を開始。25 日より重機による表土剥ぎを行う　30 日石棺墓検出　２月 13 日　島根大学学生参加　周溝墓掘削開始　20 日　全体清掃後空撮　22 日　古墳西側の旧表を除去　26 日５・６・12 号甕棺墓を半裁　３月２日　５号甕棺墓取り上げ　22 日　古墳頂部甕棺墓群のレベル入れ開始　３月 29 日　平板測量を実施　３月 31 日　現場引き渡し

［津古牟田遺跡６］

平成 30 年５月 16 日表土剥ぎ開始　22 日遺構検出・掘削開始　30 日全景写真撮影・全体図作成　６月１日　現場引き渡し

２．組織

津古牟田遺跡５・６の調査体制は以下のとおり。

＜平成 29 年度＞
５次現地発掘調査
小郡市教育委員会
教育長　清武　輝
教育部　部長　山下博文
文化財課　課長　柏原孝俊
係長　杉本岳史
技師　龍　孝明

＜平成 30 年度＞
５次整理・報告書作成
６次現地発掘調査
小郡市教育委員会
教育長　清武　輝
教育部　部長　黒岩重彦
文化財課　課長　柏原孝俊
係長　杉本岳史
技師　龍　孝明
嘱託　一木賢人

＜平成 31/ 令和元年度＞
５・６次報告書作成
小郡市教育委員会
教育長　秋永晃生
教育部　部長　黒岩重彦
文化財課　課長　柏原孝俊
係長　杉本岳史
総務課　主任主事　龍　孝明
（平成 31 年４月１日より派遣交流職員として鳥栖市勤務）

第２章　位置と環境

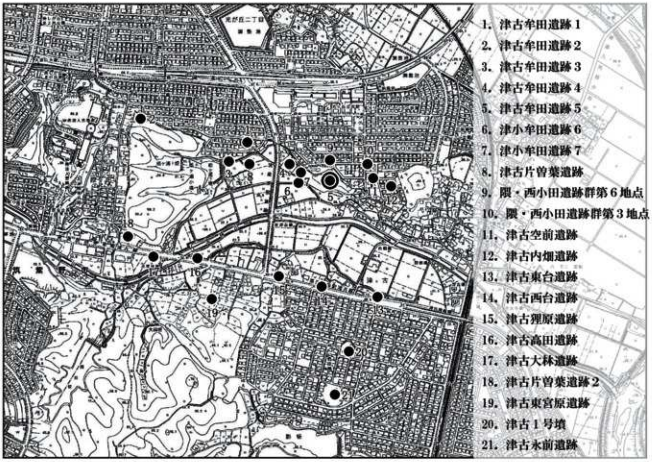
津古牟田遺跡の調査はこれまで４次にわたって行われている。１次調査（第１・２図１）は、昭和62年に宅地造成に伴って実施し、弥生時代中期初頭から前半、中期末、古墳時代後期、奈良時代と断続的に営まれた集落が検出された。このうち、貯蔵穴は弥生時代中期末のものが11基検出されており、床面から炭化米が出土している。２次調査（第１図２）は、昭和63年に宅地造成に伴って調査を実施し、弥生時代中期初頭から前半にかけての甕棺墓や木棺墓、古墳時代中期末の古墳が検出された。３次調査（第１・２図３）は、平成３年に市道改良工事に伴って調査を実施し、弥生時代中期の甕棺墓３基が検出された。４次調査（第１・２図４）は、平成13年に医院建設に先立つ調査を実施した。隈・西小田遺跡第６地点（第１・２図９）の南西側隣接地である。弥生時代中期を中心とする甕棺墓96基、祭祀土坑９基、石蓋土壙墓１基、箱式石棺墓１基などが検出された。

周辺の弥生時代後期から古墳時代の遺跡を概観すると、弥生時代後期には三国丘陵上で再び集落の形成が始まり、三国小学校遺跡、三国の鼻遺跡、みくに保育所内遺跡などが挙げられる。後期の墓地は横隈狐塚遺跡Ⅱがほぼ全容を知りうる好例である。横口式や足元掘込など多種多様な土壙墓が存在する。鏡片の伴出例も多く、集落と同様に鉄製工具もみとめられる。列埋葬は横隈上内畑遺跡２・３・４・５で後期から古墳時代初頭の土坑墓群が認められる。三沢畝道町遺跡では後期終末から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓群が検出されている。主体部は削平され、溝内からの出土土器もわずかであったものの、外来系の土器が含まれるなど、当地域の階層分化を探るうえで貴重な資料となっている。

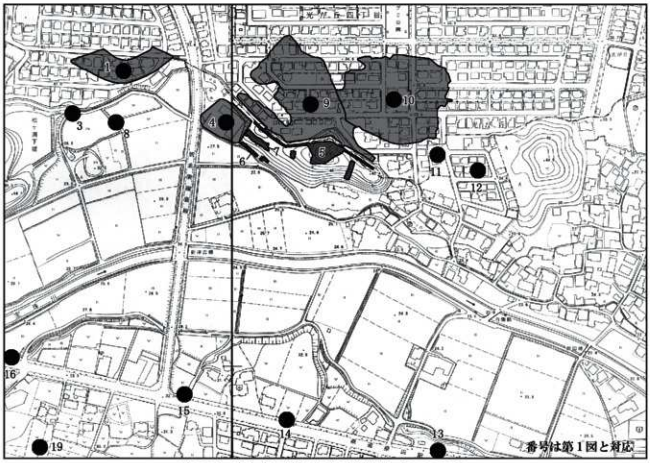
古墳時代には、三国丘陵は墓域となり、宝満川流域の首長墓系列である津古生掛古墳、津古１号墳（第１図20）、津古２号墳、三国の鼻１号墳など前期古墳が集中する地域となる。また、平成23年に調査された津古永前遺跡（第１図21）では津古１号墳（第１図20）のすぐ南の丘陵頂部において、津古古墳群に先行する墳丘墓が確認された。

津古生掛古墳は、全長33m、後円部径28mを測り、南側に５ｍほどの突出部状の前方部がつく墳形である。庄内式並行期新段階の所産と考えられる。主体部は組み合わせ式木棺が納められていたが、削平により２分の１以上が破壊され、規模は不明である。古墳裾部からは５基の方形周溝墓、３基の木棺墓が検出されており、集団墓地のような構成となっている。この古墳の被葬者と近い人びとが埋葬されたものと思われる。この津古生掛古墳と同様に棺内に赤色顔料を塗布する古墳は筑紫野市隈・西小田遺跡６地点１号墳（第１・２図９）にみることができる。径20mの円墳で主体部は割竹形木棺を採用する。小郡市側の古墳とは主体部の構造が異なり、格差を生じている可能性がある。しかし、副葬品は鉄鏃のみであり、必ずしも割竹形木棺が優位を示しているわけではないようである。ほぼ同時期の築造と考えられる片曽葉１号墳（第１図18）は、東西7.5ｍ、南北8.5ｍの規模をもつ長方形墳ともいえる墳丘形態をもつ。主体部は「H」形の組合せ式木棺で赤色顔料の塗布はみられないものの、生掛古墳と形態的に類似する。この丘陵上には多くの前期古墳が築造されているが、小規模なものがほとんどである。

三国の鼻１号墳は、全長66mを測る前期古墳である。前方部に２基、後円部に１基の主体部が確認され、墳頂には二重口縁壺が配置されていた。筑前焼ノ峠古墳は全長40.6ｍを測る九州最大の前方後方墳が築造されており、周溝からは二重口縁壺が出土した。ほぼ同時期の４世紀中頃に比定される。同町の松尾遺跡（夜須町）からは円形周溝墓などが検出されている。小郡市側では前期段階までの墳墓群はまだ検出されていないが、集落は弥生時代から連綿と続いている。大崎小園遺跡では庄内系土器が出土するが、庄内系土器の器形、技法の影響を強く受けた在地生産の土器である。三沢栗原遺跡は小規模ながらも周辺地域に同段階の集落が見られないことから、当地域における中心的な集落であった可能性がある。また、津古生掛遺跡87号住居からは古墳とほぼ同時期の土器がまとまって出土しており、古墳に伴う墓前祭祀的なものと考えられている。



第１図　周辺遺跡分布図（S=1/25,000）



第２図　津古牟田遺跡調査区位置図（S=1/5000）

第３章　津古牟田遺跡５の概要

１．遺構の内容

検出された主な遺構は古墳３基、周溝墓２基、石棺墓４基、木棺墓３基、土壙墓７基、甕棺墓38基、貯蔵穴５基、土坑18基である（第３図）。

２．調査区の概要

調査区の標高は最高所で48mを測る。北側は筑紫野市の住宅地となっており、隈・西小田遺跡群第６地点として調査が行われた。本調査区は同一丘陵上にあり、丘陵の南側尾根から南側斜面にあたる。

第４章　津古牟田遺跡５の遺構と遺物

１．弥生時代の遺構と遺物

１）貯蔵穴

１号貯蔵穴（第３・４図　図版３）

丘陵頂部から南側に下った標高43m付近で検出した。平面は楕円形を呈し、床面は円形を呈する。長軸1.82m、短軸1.32m、深さは最大で1.22mを測る。北西側でややオーバーハングする壁面をもち、南側は比較的緩やかな落ち込みとなる。床面は西側がやや深い。

出土遺物

弥生土器甕口縁部から胴部、甕底部等が出土した。

２号貯蔵穴（第３・４図）

上面は削平を受けるが、周辺の遺構配置、遺構形状から貯蔵穴と判断した。平面は円形で、長軸1.86m、短軸1.62m、現況で深さは最大0.49mを測る。床面はほぼ平坦である。

出土遺物はみられなかった。

３号貯蔵穴（第３・５図）

１号墳西側裾部で検出した。平面楕円形で、長軸1.51m、短軸1.05mを測る。上面は性格不明の掘り込みが広範囲に及んでいる。１号墳築造時の掘り込みであろうか。検出面からの深さは1.41～1.49mを測る。壁面はややオーバーハングし、床面は平坦をなす。

出土遺物（第９・23図）

弥生土器甕口縁部から胴部（第９図１）、甕底部（第９図２）が出土した。ほかに最上層より石庖丁（第23図１）、埋土中層やや上位から十字形石器（第23図５）が出土した。

４号貯蔵穴（第３図）

26号甕棺墓に切られる貯蔵穴である。丘陵頂部に位置する。平面円形か。径1.08m前後を測る。検出面からの深さは0.42～0.75mを測り、床面はほぼ平坦である。出土遺物はみられなかった。

２）土坑

１号土坑（第３図）

調査区Ｅ区で検出した平面不整円形の土坑である。長軸0.93m、短軸0.78mを測る。埋土は暗褐色土の単層で出土遺物なし。土壙として調査したが、周辺の遺構配置から攪乱と考えられる。

２号土坑（第３図）

１号土坑に隣接して検出した。平面長楕円形で長軸1.20m、短軸0.31mを測る。埋土は淡褐色土の単層。

出土遺物（第９図　図版９）

弥生土器甕口縁部から胴部（３）、甕底部（４）が出土した。

3号土坑（第３図）

２号土坑の南側で検出した。溝状遺構に切られる。平面楕円形で長軸 0.76m、短軸 0.48m を測る。北側床面にピット状の掘込みあり。出土遺物なし。土壙として調査したが､周辺の遺構配置から攪乱と考えられる。

4号土坑（第３図）

３号土坑西側で検出した。上面は攪乱により失われる。残存部で平面円形を呈する。長軸 0.85m､短軸 0.70m を測る。遺物は全て浮いた状態で出土しており、遺構に直接伴うものではない。流れ込みと考えられる。

出土遺物（第９図　図版９）

弥生土器甕蓋（５・６）、甕底部（７）が出土した。

5号土坑（第３・６図　図版４）

４号土坑の南側で検出した。南側は削平により失われている。残存部で東西 1.02m を測る。全容は明らかでないが、遺構形状から貯蔵穴の可能性がある。西壁はわずかにオーバーハングする。北側床面にピット状の掘り込みがあるが性格不明。東側から投げ込まれたようにまとまった土器が出土している。

出土遺物（第９図　図版９）

弥生土器甕（８～11）が出土した。

6号土坑（第３・６図）

調査区北端、１号墳西側、２号木棺墓北側で検出した。平面不整円形を呈する。長軸 2.39m、短軸 1.96m を測る。検出面からの深さは最大 0.34m と浅い。北東側にテラス状の段がある。廃棄土坑と考える。

出土遺物（第９図）

弥生土器甕口縁部から胴部（12・14）、甕底部（13）が出土した。

7号土坑（第３図　図版４）

６号土坑南西側で検出した。性格は不明。埋土は丘陵頂部側から流れ込んだものと考えられる。

出土遺物（第９図）

弥生土器壺口縁部から体部（１）、甕口縁部（２～４）が出土した。

9号土坑（第３図）

１号墳南側で検出した。平面円形で、ピットに切られる。未完掘であるが、性格不明。

出土遺物（第９図）

弥生土器壺口縁部（５）、甕底部（６）が出土した。

10号土坑（第３図）

１号墳南側で検出した。平面不整方形を呈し、南北 1.43m、東西 1.32m を測る。切り合い関係は不明瞭であったが、11 号土坑を切ると考える。11 号土坑と形状が似ており、貯蔵穴と考える。

出土遺物（第９図　図版９）

甕口縁部から胴部（７）、甕口縁部と同一個体の底部（８）が出土している。

11号土坑（第３図　図版４）

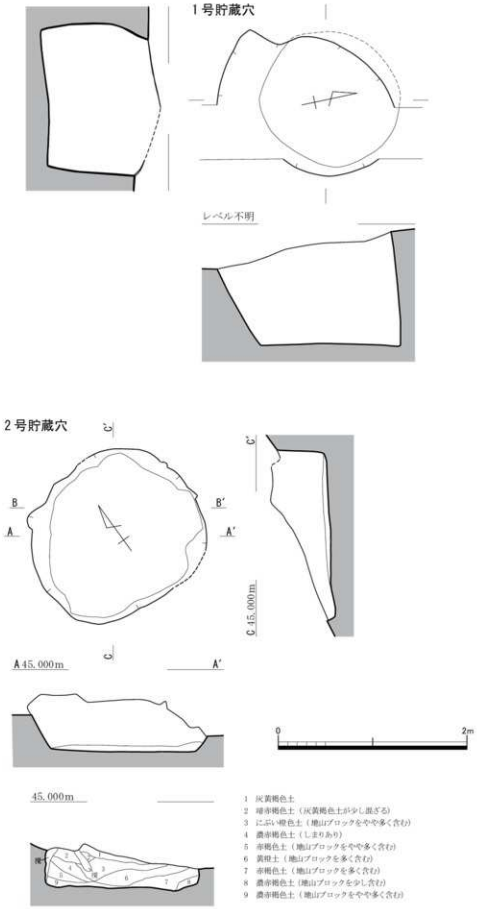
10 号土坑に切られる平面方形の土坑である。床面に接して土器が出土した。東西 1.55m、南北 1.10m を測る。床面は円形を呈する。貯蔵穴と考える。

出土遺物（第 11 図　図版９）

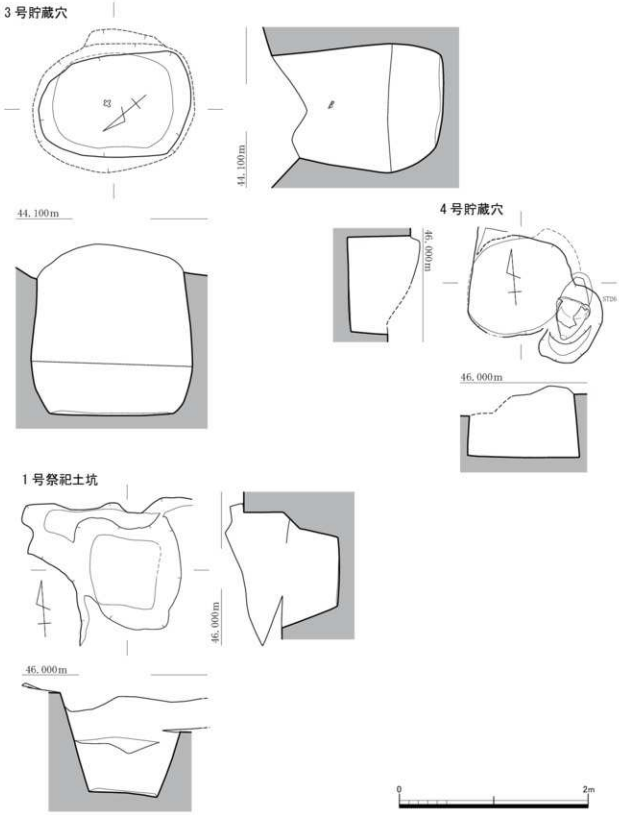
弥生土器甕（１・２）、黒色磨研壺（３）小形の甕または鉢（４）が出土している。

12号土坑（第３・６図　図版５）

１号墳南側で検出した。平面不整隅丸方形で、西側は階段状になり、東側は掘り込まれる。東側床面付近で平坦面をもつ自然石が２枚重なるように出土した。甕棺墓の可能性を考えていたが、自然石除去後掘り込み等は見られなかった。使用されなかった甕棺墓壙か。出土遺物はみられない。



第４図　１・２号貯蔵穴平・断面図（S=1/40）



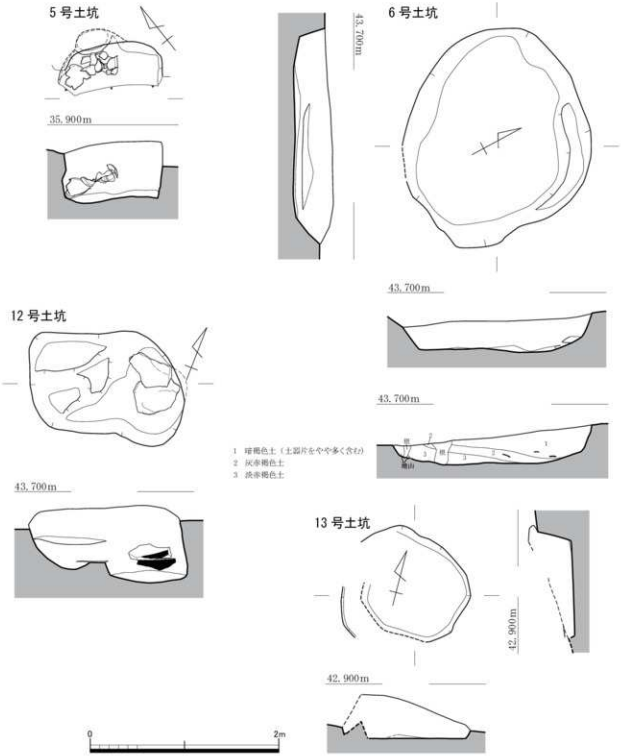
第5図　3・4号貯蔵穴 1号祭祀土坑平・断面図（S=1/40）

13号土坑（第3・6図）

15号甕棺墓に切られる。検出面からの深さは0.1m前後と浅く、出土遺物なし。性格不明。

14号土坑（第3・7図）

28号甕棺墓の東側で検出した。丘陵頂部落ち際に位置しており、平面は楕型で南東側が開口する。長軸



第6図　5・6・12・13号土坑平・断面図（S=1/40）

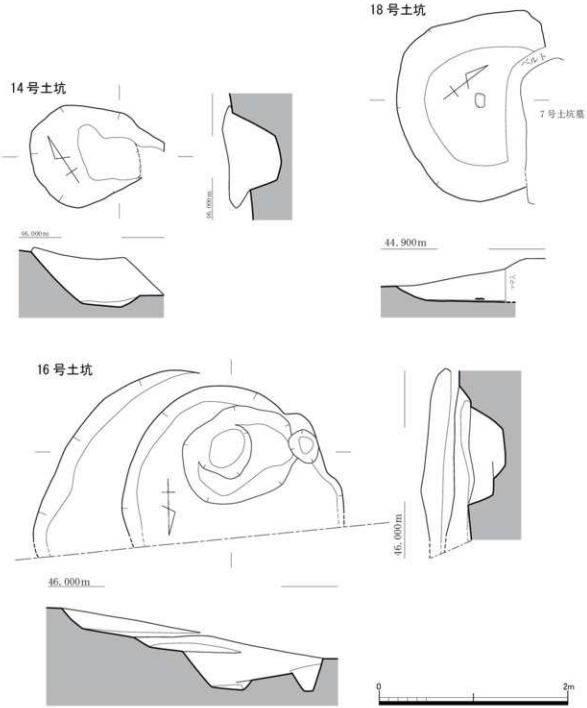
1.42m、短軸 1.09m を測る。

出土遺物（第９図）

丹塗壺口縁部（９）が出土した。

16 号土坑（第３・７図）

調査区北端で検出した。北側は調査区外へと続く。残存部で平面円形を呈すると考えられる。断面形はすり鉢状を呈する。長軸 1.69m を測る。



第７図　14・16・18 号土坑平・断面図（S=1/40）

出土遺物（第９図）

大形甕口縁部（10）が出土した。

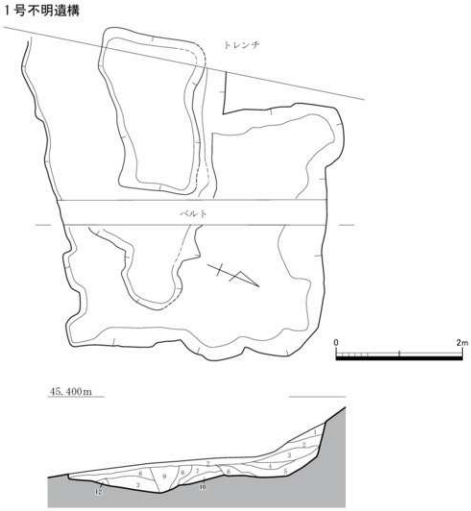
18 号土坑（第３・７図）

７号土壙墓に切られる。平面円形で径 1.97m 前後を測る。検出面からの深さは最大で 0.41m 程度と浅い。中央付近から自然石が１点出土したが性格不明。

３）土壙墓

３号土壙墓（第３・19 図）

11 号甕棺墓に隣接して検出した足元掘り込み式の土壙墓である。平面円形で長軸 1.57m、短軸 1.43m を



第８図　１号不明遺構平・断面図（S=1/60）

測る。墓壙は北側に掘り込まれ、東西に軸をとる。床面で 1.14m、幅 0.39m を測る。出土遺物はみられない。

４）祭祀土坑

１号祭祀土坑（旧５号貯蔵穴）（第３・５図）

28 号甕棺墓に隣接して検出した。丘陵頂部落ち際に位置する。甕棺墓壙との切り合いにより平面は不明瞭である。現状で不整方形を呈する。長軸 1.10m、短軸 1.07m を測る。上面のほとんどが失われている。

出土遺物（第９図　図版９）

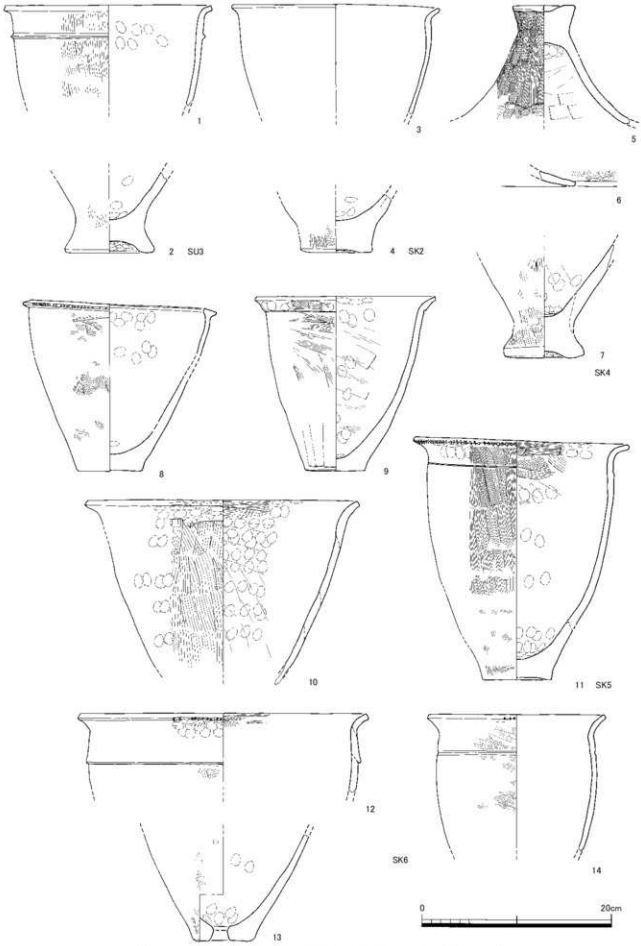
弥生土器甕（１・２）、丹塗高坏口縁部（３）、丹塗高坏脚部（４）が出土した。

＊なお、『津古牟田遺跡５　弥生時代甕棺墓地編』2019 で掲載漏れのあった６号甕棺出土勾玉の実測図（第 12 図５）写真（図版 10）を掲載した。お詫びいたします。

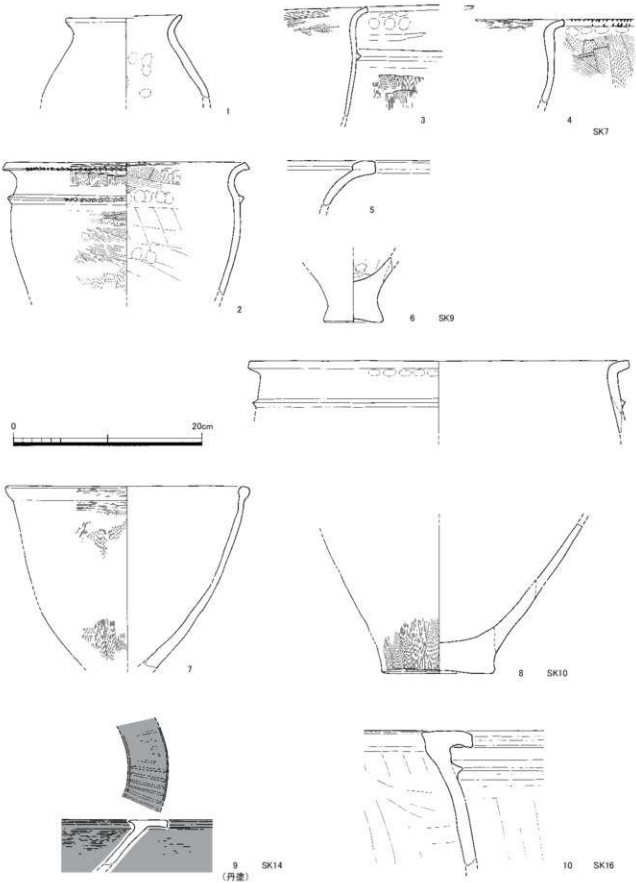
５）不明遺構

１号不明遺構（第３・８図　図版５）

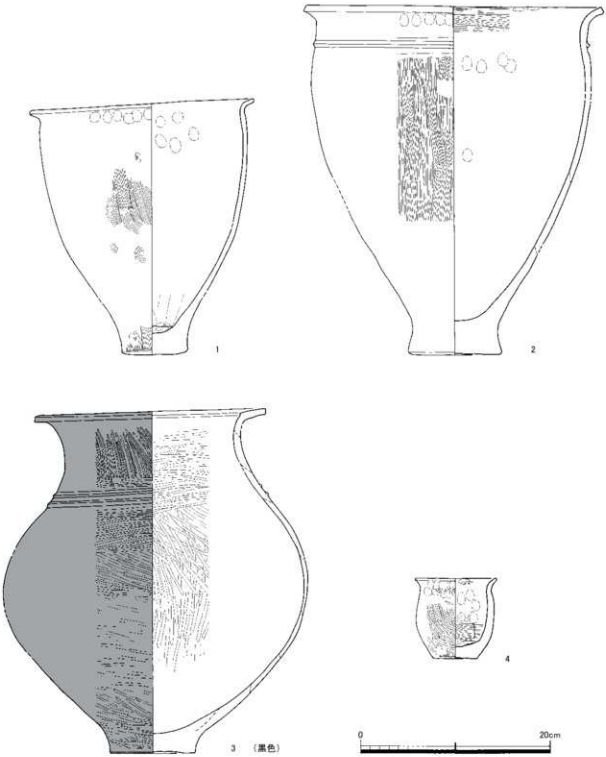
１号墳頂部東側斜面で検出した。北壁はほぼ垂直に削り出し、床面は東側で凹凸が著しいが、西側では平坦面をつくる。古墳築造以前と考えられる。岩盤を掘り込んでいるため粘土採掘坑とも考えにくい。



第９図　３号貯蔵穴・２～６号土坑出土土器実測図（S=1/４）



第 10 図　7・9・10・14・16 号土坑出土土器実測図（S=1/ 4）



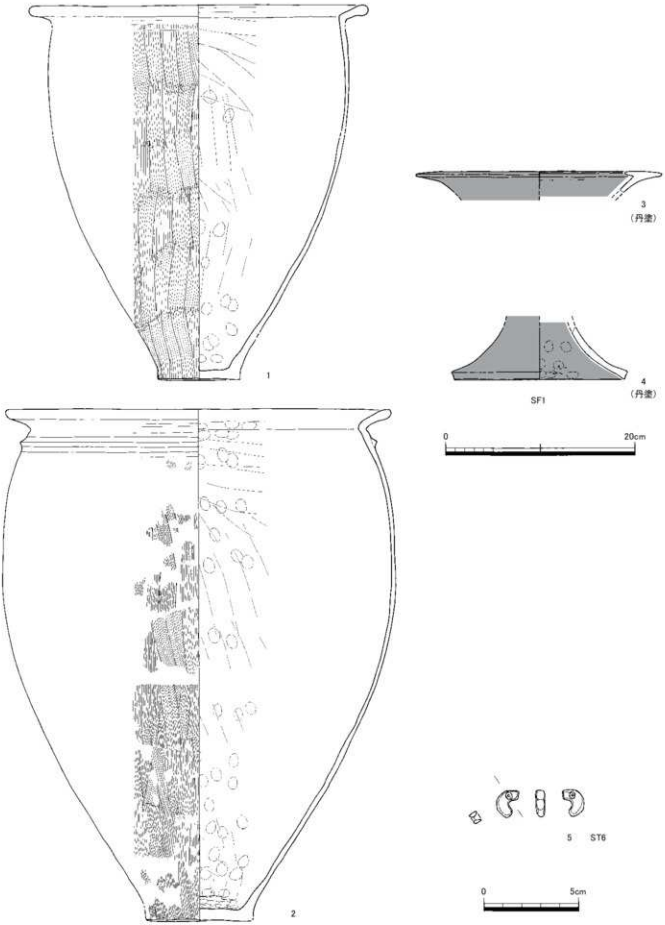
第11図　11号土坑出土土器実測図（S=1/4）

2号不明遺構（第3図）

1号墳南側で検出した。広範囲に広がっているが、明確なプランはつかめなかった。不明遺構として調査したが、自然地形と考えられる。床面は凹凸があり、北側は段落ちとなる。わずかに遺物が出土した。

3号不明遺構（第3図）

1号墳西側裾部付近に広がる。複数の遺構の切り合いとも考えられるが、それぞれの遺構プランは不明瞭である。不明遺構として報告する。出土遺物はみられない。



第12図　1号祭祀土坑・6号甕棺出土遺物実測図（S= 1/2・1/ 4）

2．古墳時代の遺構と遺物

1）古墳

1号墳（第3・13図　図版6）

調査区北端の最高所に立地する古墳である。北側3分の2と内部主体は筑紫野市により隈・西小田遺跡群第6地点で調査されており現存しない。主体部は筑紫野市の調査によって、割竹形木棺であることが明らかとなっている。ここでは、津古牟田1号墳として報告する。

墳丘規模は東西残存部で約25.53 m、南北約17.16 mを測る。墳裾は標高44 m付近と考えられる。裾部はなだらかに丘陵平坦面につながっており、不明瞭である。東側は丘陵の段落ち部と重なっているため、東側から見ると、見かけの大きさは実際の規模以上に大きく見える。なお、墳丘には、葺石や段築は認められなかった。墳丘の築成方法は、まず、地山の花崗岩ばいらん土および岩盤を削りだして、地山を成形し、墳丘斜面および墳丘頂部に盛土を施している。墳丘頂部は甕棺墓地として整地された平坦面を利用しており、甕棺墓地上に盛土を施している。

2号墳（第3・14図　図版2）【津古牟田5報告書全体図で3号墳としているもの】

調査区北端西側で検出した。調査範囲が狭小であったため、全容は明らかでない。墳丘は確認できず、周溝のみ検出している。周溝は直線的にのび、角は直角に曲がることから方墳と考えられる。規模を確認できるのは南側のみであるが、1辺10.64mを測る。周溝の幅は1.13～1.99mを測る。西側と南側の周溝接点は段がつく。周溝内から自然石が埋没した状態で出土した。周辺の状況から石棺墓の石材と考えられるが、古墳築造時に既にあったものか周溝埋没過程の早い段階で流れ込んだものか判断できなかった。周溝の内側で4号石棺墓を検出しているが、やや周溝側に偏っていることから、古墳に伴うものか不明である。

3号墳（第3図）（1・2号石棺墓・13号甕棺墓検出地点）

2号墳西側で検出した。墳丘が残るが、調査範囲狭小で墳形は明らかでない。西側は周溝状の落ち込みがあり、墳丘規模に対して幅が不自然に広く不明瞭で、東側は周溝が確認できなかった。隈・西小田遺跡群第6地点調査時にトレンチ調査が実施されている。墳丘下層から1・2号石棺墓、13号甕棺墓を検出した。

2）周溝墓

1号周溝墓（第3・15・16図　図版2・6）

1号墳の南側墳丘裾部付近、斜面の落ち際に位置する。表土直下で検出した。当初は2号墳として調査を実施したが、周辺の土層断面を精査した結果、墳丘が認められなかったことから、周溝墓とした。ただし、周辺は既に削平を受けており、墳丘が失われている可能性もある。周溝には切り合いが見られ、調査時は掘り直しと考えていたが、主体部が2基重なっていることから、2基の周溝墓が切り合っていたと考えられる。先行する遺構は、円形周溝墓である。径9.50mを測り、南側は削平により周溝が遺存しない。周溝は幅1.21mを測る。主体部は1号木棺墓と考えられる。後出する遺構は、上面削平を受けているが、周溝墓と考える。北西端が失われており詳細は明らかでないが、方形周溝墓か。主体部は1号木棺墓を切るが、検出時に切り合い関係を捉えられなかったため、詳細は不明である。第15図第2層が該当する。残存部から長軸1.88m、短軸0.70mを測る。残存部で深さ0.20mしか残っておらず、上面が削平を受けていることは明らかである。墳丘があった可能性が考えられる。周溝より、土師器小型丸底壺（1・2）、壺（3）が出土した。

2号周溝墓（第3・15図　図版2）

調査区南端、1号周溝墓西側に接して検出した円形周溝墓で、上面は大きく削平を受けていることから円墳の可能性がある。1号周溝墓が切ると考える。径13.05mを測り、1号円形周溝墓を切る。周溝幅は1.47m、深さは最大で0.66mを測る。南側は周溝が巡らず、陸橋状となる。主体部は3号木棺墓である。

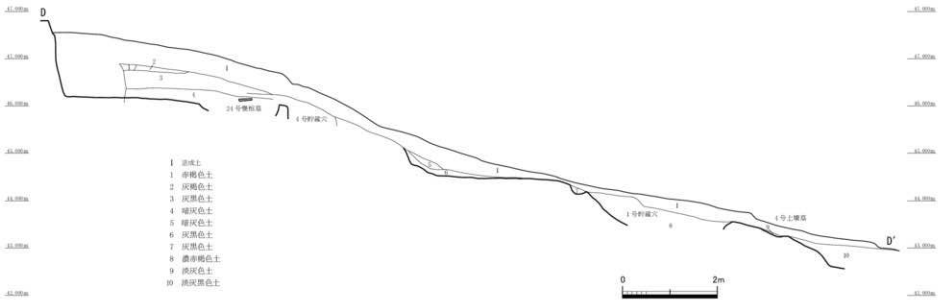
主体部は3号木棺墓である。淡緑白色粘土が部分的に見られたことから、粘土槨木棺墓と考えられるが、遺存状態が極めて悪く、詳細は明らかにできなかった。出土遺物はみられなかった。

3）石棺墓

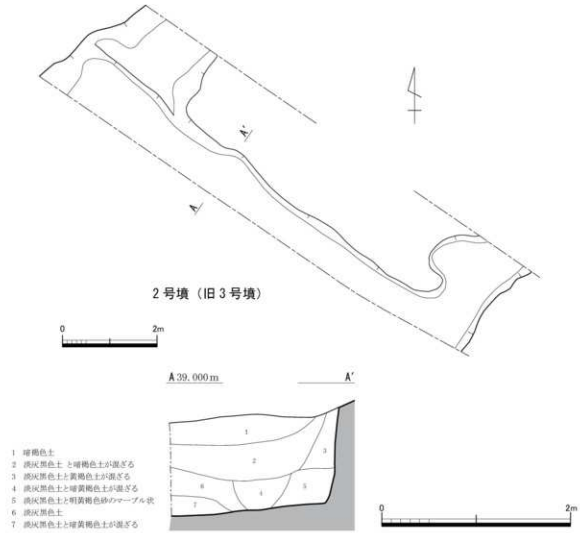
1号石棺墓（第3・17図）

5号墳西側で検出した石棺墓である。長軸1.05m、短軸0.33mを測る。頭位側側石と小口石の3点が確認できる。東側墓壙には石材痕跡がなく、当初から石材がなかったと考えられる。いわゆる半石棺墓である。

1号墳墳丘トレンチ



第13図 1号墳墳丘土層断面図（S=1/80）



第14図　2号墳平・断面図（S=1/40・1/80）

墓壙の掘り方は確認できなかった。小型の石棺墓である。出土遺物はみられなかった。

2号石棺墓（第3・17図）

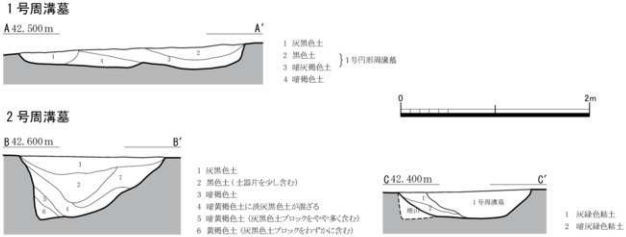
1号石棺墓に隣接して検出した石棺墓である。1号石棺墓とは軸が90度異なる。長軸2.25m程度となろうか。短軸0.46mを測る。1号石棺墓と同様、半石棺墓で、南半は側石が見られない。床面に石材の痕跡も見られないことから、当初より存在しなかったと考えられる。出土遺物はみられなかった。

3号石棺墓（第3・17図　図版7）

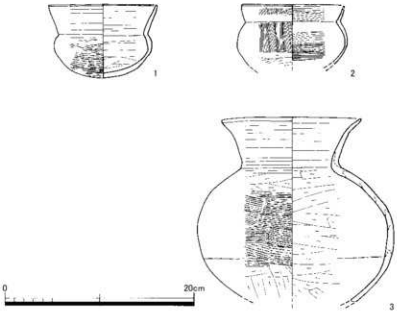
3号墳西側で検出した石棺墓である。墓壙の平面は長方形で、2段掘りである。1次墓壙は長軸1.20m、短軸0.77mを測る。内法は長軸0.58m、短軸0.25mを測る。2次墓壙は南側に偏っている。4点の板状自然石で蓋をする。南北ともに側石は2点で、南側は隙間を埋めるように自然石1点が配置される。出土遺物はみられなかった。

4号石棺墓（第3・17図　図版8）

3号墳周溝内側で検出した石蓋石棺墓である。平面長方形を呈し、2段掘りである。1次墓壙は長軸2.61m、短軸1.30mを測る。棺の内法は長軸1.84m、短軸0.31mを測る。棺は墓壙と軸が異なる。蓋石内面にわずかに朱が付着するが、範囲不明瞭。6点の板石状自然石で蓋をする。側石のうち北側は4石、南側は3石、小口石で構成される。蓋石の噛み合わせのためか、側石上に拳大の自然石3点が置かれる。出土遺物はみられなかった。



第 15 図　1・2号周溝墓周溝土層断面図（S=1/40）



第 16 図　1号周溝墓周溝内出土土器実測図（S=1/ 4）

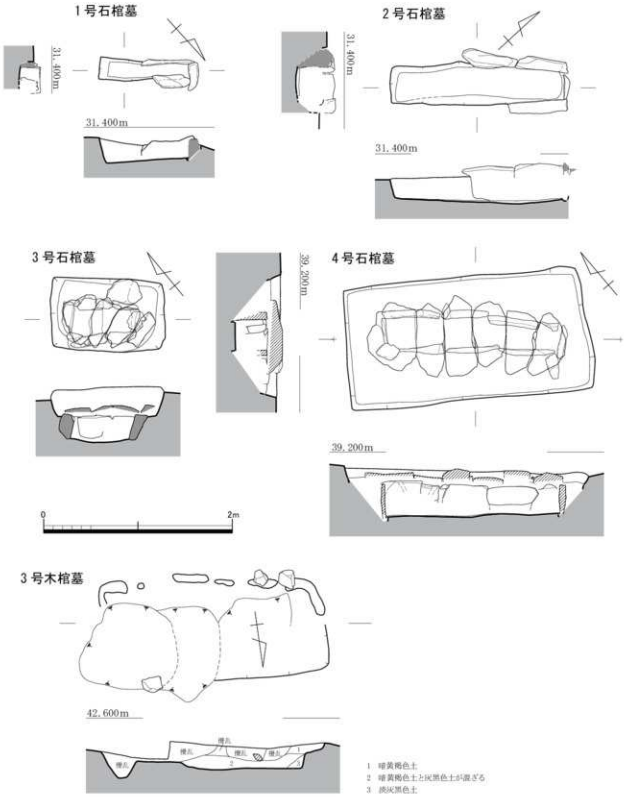
4）木棺墓

1号木棺墓（第3・18図　図版6）

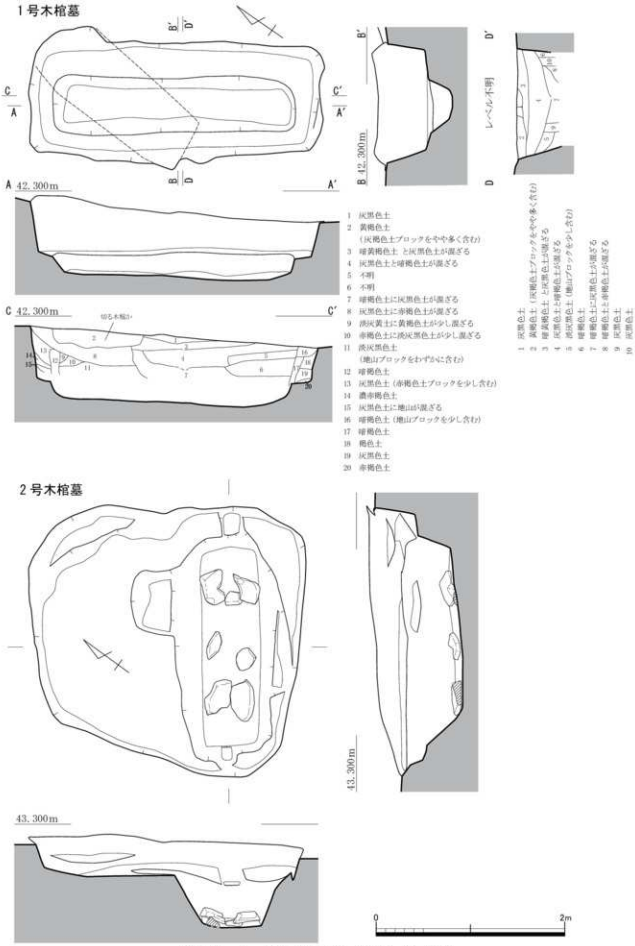
1号周溝墓中央付近で検出した木棺墓である。墓壙は2段掘りで、2次墓壙の形態から割竹型木棺と考えられる。土壙墓に切られる。1次墓壙の規模は長軸 3.14m、短軸 1.29m を測る。埋葬主体は土層から割竹形木棺と考えられる。墓坑の北東側に寄っている。上層付近から粘土塊が数点出土しており、粘土による充填が行われていた可能性も考えられる。出土遺物はみられない。

2号木棺墓（第3・18・22図）

1号墳西側で検出した大型の木棺墓である。掘り方は平面台形状で、2段掘りである。北側の1次墓壙は浅くテラス状で、南側が2次墓壙となる。墓坑に隣接して、ステップ状の掘り込みがある。墓坑の掘り方からは木槨をもつ組合式木棺が想定される。検出面の埋土は南北で全く異なっており、当初は土坑と墓坑の切り合いと考えていた。墓壙埋土は上層から下層までブロックの含まれない黒色土であったため、土壙と考え、調査を急ぐあまり全体を掘り下げ、土層図は作成していない。十分な精査を行わなかったことが悔やまれる。



第17図　1～4号石棺墓・3号木棺墓平断面図（S=1/40）



第18図　1・2号木棺墓平・断面図 (S=1/40)

墓壙は２段掘りで、１次墓壙は浅い。２次墓坑上面は灰黒色土、下層は黒色土で水平堆積である。床面付近は、地山の赤褐色土に黒色土ブロックが混ざった土が確認できた。最下層は地山と同色で、黒色土ブロックをやや多く含む。北側の１次墓壙は、２次墓坑に隣接して淡褐色土、その周囲に地山と同色同質の固く締まる黄褐色土が堆積する。検出面では地山との違いは判断できなかったため、淡褐色土の掘削後、床面を追うように壁面の検出に至った。２次墓壙の下半、壁面は地山に似る赤褐色粘土が薄く張り付く。垂直に近い掘り方で面をもつことから、墓壙規模からも木棺が存在していた可能性がある。

特徴的な点は、墓坑内床面には人頭大の自然石が３列計７点配置されており、棺床と考えられる。床面の傾斜と棺床の配置から北東側が頭位と考えられる。東側の石は、平坦面をやや中央に向ける。中央寄りの箇所は故意に打ちかかれたように見える。石の間には、拳大の略方形を呈する石が配置される。この石の上面やや浮いた位置から紡錘車（第 22 図７）が出土した。中央の２石は互い違いに配置される。西側は、平坦面をやや中央に向け、断面 V 字形となるよう密着させて配置される。

墓壙規模及び棺床の配置から、棺体の規模は、最大で長さ 2.13m 以内、幅は 0.65m となる。ただし、壁面付近では棺の痕跡は確認できず、地山と同色の赤褐色粘土であったことから、棺埋置後に粘土による充填が行われていたと考えられる。そのため、棺体は上述した規模より小さいと考えられる。

墓坑の東西両端には、幅 25cm、奥行 20 ～ 25cm 程の窪みが作られている。棺体軸上に掘られており、埋葬施設と関連すると考えられる。北側の埋土中から、粘土塊が少量出土した。墓坑に伴うものかは不明である。

３号木棺墓（第３・17 図）

上面は削平され、著しく撹乱を受けているため全容は明らかでない。残存部で長軸 2.40m、短軸 1.12m を測る。南側では列状に並ぶ灰緑色粘土を検出しており、北側は著しく撹乱を受けており粘土を確認できなかったが粘土槨の存在が想定される。主体部は２号墳と同様木棺墓と考えるが、土層からは痕跡を確認できなかった。検出面で自然石が出土したが、墓壙との関係は不明である。出土遺物はみられない。

５）土壙墓

１号土壙墓（第３・19・22 図）

調査区北端、１号墳西側裾部付近で検出した土壙墓である。平面長楕円形で、南側一部を撹乱に切られる。長軸 2.18m、短軸 0.53 ～ 0.63m を測る。床面で長軸 1.94m、短軸 0.36m を測る。

検出面は赤褐色土の地山に似る土であった。土層から、墓壙の北側は第３層のように崩落した様子が伺えることから、木棺墓の可能性も考えられるが、木棺痕跡は確認できなかった。出土した刀子（第 22 図 10）は、土層から上から切るピット第 13 層直上より出土しており、墓に伴うものではないと考えられる。

４号土壙墓（第３・19 図）

１号墳トレンチにかかる土壙墓である。基盤層を掘り込んでいる。北側はプランがやや不明瞭である。平面プランは長軸 1.62m、短軸 1.05cmを測る不整楕円形で、２段掘りを呈する。墓壙は掘り方と軸が異なり、長軸 0.95m、短軸 0.46m を測る。出土遺物なし。

５号土壙墓（第３・20 図　図版８）

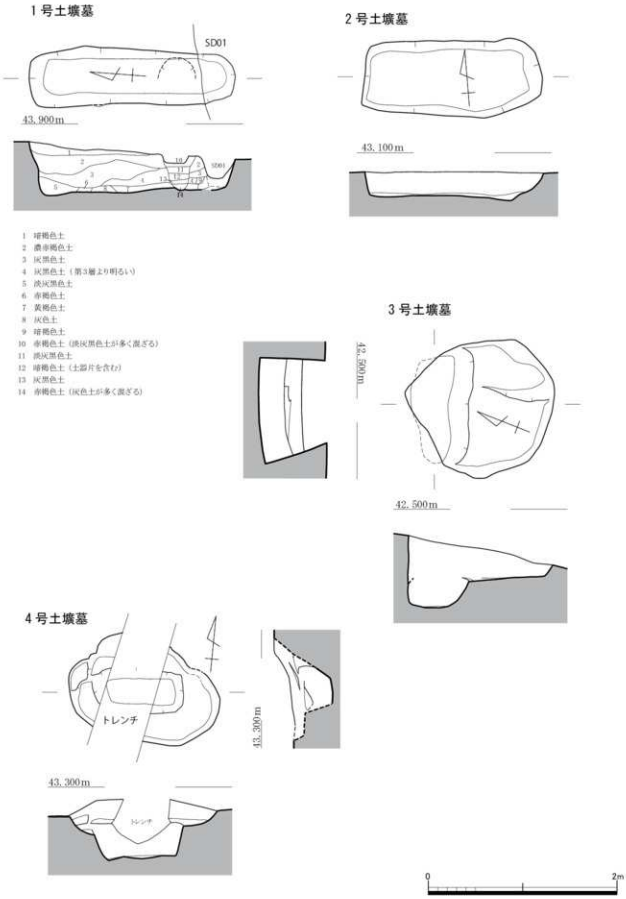
３号貯蔵穴西側で検出した土壙墓である。平面長方形を呈し、長軸 1.98m、短軸 0.51m を測る。出土遺物はみられない。

６号土壙墓（第３・20 図）

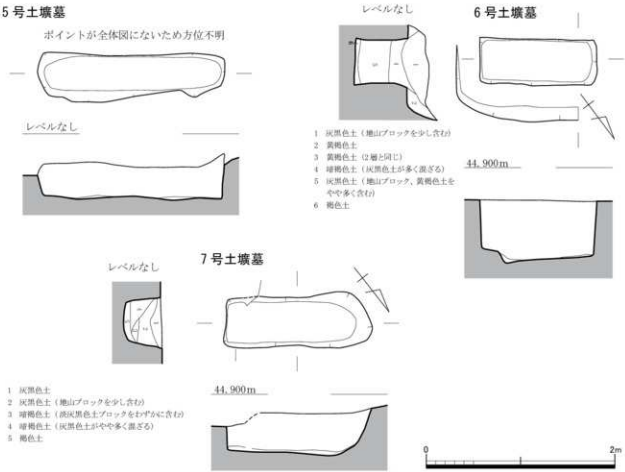
１号墳墳丘裾部南側で検出した土壙墓である。平面長方形を呈する。７号土壙墓と隣接し、軸を一にする。長軸 1.24m、短軸 0.49m を測る。出土遺物はみられない。

７号土壙墓（第３・20 図）

６号土壙墓に隣接して検出した土壙墓である。18 号土坑を切る。平面不整長方形を呈する。長軸 1.56m、短軸 0.53m を測る。出土遺物なし。



第 19 図　1～4 号土壙墓平・断面図（S=1/40）



第20図　5～7号土壙墓平・断面図（S=1/40）

3．古代の遺構と遺物

1）土坑

8号土坑（第3・21図）

7号土坑西側で検出した不整形の土坑である。須恵器提瓶（第21図1）が出土した。

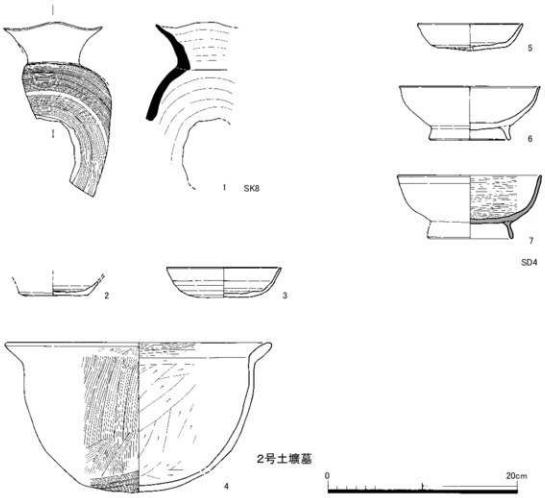
2）土壙墓

2号土壙墓（第21・22図　図版9）

平面プランはやや歪な隅丸長方形を呈す。墓壙の規模は長軸2.01m、短軸0.79m、深さは最大で0.30mを測る。床面は西側がわずかに高い。埋土は暗灰黒色土に灰白色の花崗岩バイラン土が多く混ざっており、人為的な埋土と考えられる。棺の痕跡は確認できなかったことから、土壙墓と判断した。床面からやや浮いた状態で土師器坏（第21図2・3）が出土した。出土遺物から古代の土壙墓と考えられる。

4．小結

津古牟田遺跡5では、弥生時代前期の貯蔵穴を検出し、当該地の集落形成がこの時期に始まっていたことがわかる。この丘陵上では弥生時代前期末から甕棺墓地の形成が開始される。中期前半から中期中頃には甕棺墓地の形成が最盛期を迎えるが、中期末から後期初頭には衰退している。同丘陵上の住居跡も後期前半には見られなくなり、後期後半の様相は明らかではない。調査範囲が狭小なため全容は明らかではないが、甕棺墓が確認されていない丘陵西側尾根上には石棺墓が形成されている。その後、この地点には方墳が築造されている。甕棺墓域とは異なる墓域として利用され始める。津古牟田1号墳が丘陵最高所に築造されると、その周辺にも割竹形木棺を主体部とする周溝墓が形成されるなど、丘陵上が墓域として占有されているようになる。



第21図　8号土坑・4号溝・2号土壙墓出土土器実測図（S=1/4）

第５章　津古牟田遺跡６の遺構と遺物

１．遺構の内容

調査区は長さ 28.6m、幅 3.2 ～ 4.4m の範囲で、津古牟田遺跡４・５と同一丘陵上の丘陵南西裾部にあたる（第３図）。地形改変が著しく、西側は地形の落ちとなっている。検出された主な遺構は土壙状の遺構が３基で、うち１基は埋土の様子から攪乱と考えられる。明確な遺構は確認できなかった。

調査区北側で検出した土坑は調査区北側につづく。規模は長軸 1.43+ α m、短軸 1.37+ α m、深さは最大で 1.01m を測る。上層は暗灰色粘質土で客土と考えられる。下層は地山が混ざっており人為的に埋められたと考えられる。西側はピット状に１段掘り込まれるが性格不明。出土遺物はみられない。

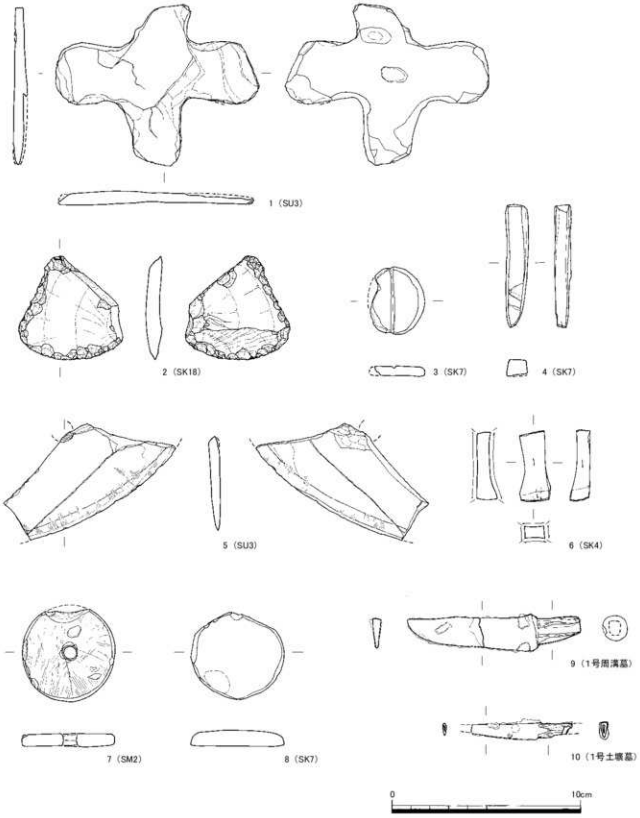
その南側で検出した土坑状のものは長軸 4.02m、短軸 2.10m、深さは最大で 1.50m を測る。検出面でわずかに土器片が出土したが、中層以下は見られない。下層は暗灰色粘質土に濃黄褐色土ブロックが少量混ざる。

２．小結

本調査区は丘陵裾部にあたる。２基の土壙状の遺構を検出したが性格不明である。出土遺物は僅少で明確な集落遺構とは言い難い。ただし、土壙埋土からは人為的な埋戻しの跡が見られ、時期不明ながら丘陵裾部まで集落域が展開していた可能性は考えられる。

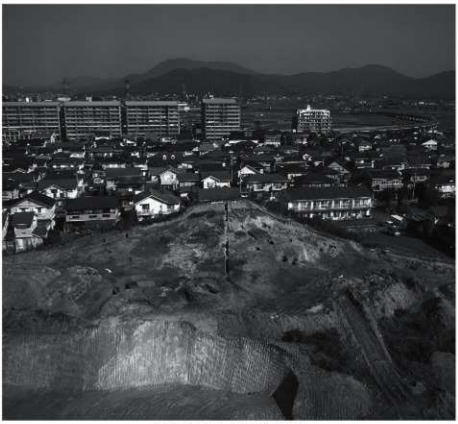
島根大学生発掘調査作業風景

三国中学校職場体験風景

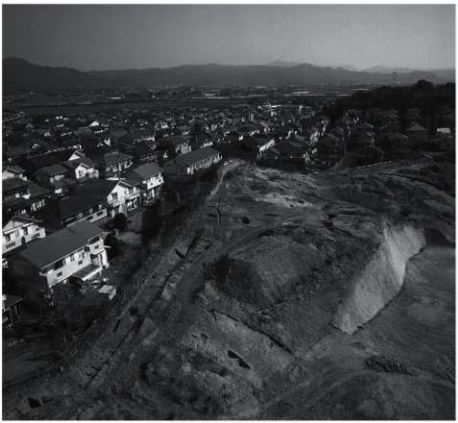


第22図　石製品・土製品・鉄製品実測図（S=1/2）

図版 1



調査地全景（南上空から）



調査地全景（西上空から）

図版２

１・２号周溝墓（上空から）

２号墳（上空から）

１号貯蔵穴（南から）

３号貯蔵穴（北から）

３号貯蔵穴十字形石器出土状況
（南東から）

図版 4

5号土坑（西から）

7号土坑（東から）

11号土坑（南東から）

12 号土坑（北から）

1 号不明遺構（南西から）

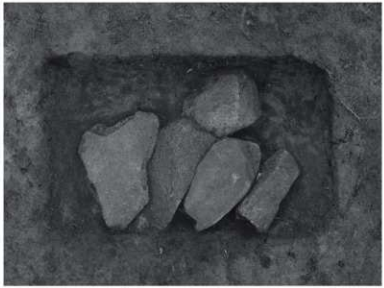
1 号不明遺構土層断面（東から）

図版６

１号墳全景（南東から）

１号周溝墓（北東から）

１号木棺墓土層断面（南から）



3号石棺墓石蓋検出状況（南西から）

3号石棺墓石蓋検出状況（西から）

2号木棺墓検出状況（南西から）

図版８

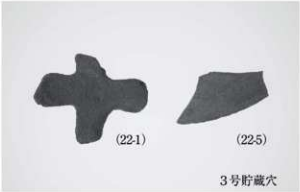
４号石棺墓石蓋検出状況（南東から）

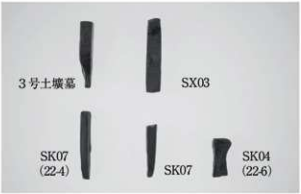
４号石棺墓検出状況（南西から）

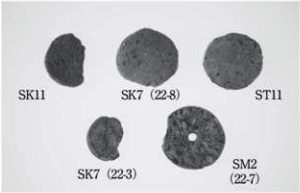
５号土壙墓（南西から）

SK2（9-3）
SK10（10-7）
SF1（12-1）
SK4（9-5）
SK11（11-4）
SW1（16-1）
SK5（9-11）
SK11（11-2）
SW1（16-2）
SK5（9-8）
SK11（11-13）
SW1（16-3）
SK5（9-9）
SK11（11-3）
SK8（21-1）
SK52（9-10）
SK15
SR2（21-4）

図版 10


(22-1)
(22-5)
3号貯蔵穴

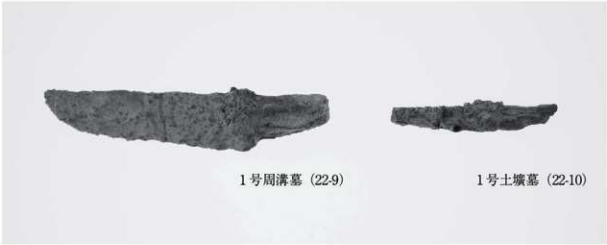

3号土壙墓
SX03
SK07
(22-4)
SK07
SK04
(22-6)


SK11
SK7（22-8）
ST11
SK7（22-3）
SM2
(22-7)

ST6（12-5）

SK07

SK10


1号周溝墓（22-9）
1号土壙墓（22-10）

	報　告　書　抄　録
ふりがな	つこわたいせき
書名	津古牟田遺跡６
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 333 集
編著者名	龍　孝明
編集機関	小郡市教育委員会　小郡市埋蔵文化財調査センター
所在位置	〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5147-3　℡0942－75－7555
発行年月日	令和２年３月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
津古牟田遺跡５	福岡県	40216		33°15′55″	130°20′01″	2017・10・30 ～ 2018・3・31	959.88 ㎡	宅地造成
津古牟田遺跡６	小郡市 津古			33°26′54″	130°33′31″	2018・5・16 ～ 2018・6・1	214.13 ㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
津古牟田遺跡５・６	墳墓 その他の墓地	弥生 古墳 古代	貯蔵穴　土坑 甕棺墓　祭祀土坑 土壙墓　木棺墓 石棺墓　古墳	弥生土器 土師器 須恵器	

当遺跡はこれまでに４次の調査を実施しており、弥生時代中期初頭から後期前半にかけての甕棺墓が展開していることが明らかとなっている。５・６次調査は、筑紫野市側の隈・西小田遺跡群第６地点に連なり、甕棺墓だけでなく、古墳時代前期の円墳や周溝墓があり、今回の調査でもその墓域の広がりを確認できた。

津古牟田遺跡６

小郡市埋蔵文化財調査報告書第 333 集

令和２年　３月　31 日

発行　　小郡市教育委員会

小郡市小郡 255－１

出版　　片山印刷有限会社

小郡市祇園 1－8－15